

庄内空港と地質調査の関り

坂田 昭彦

平成3年10月1日 山形県庄内地方に待望の庄内空港が開港した。

庄内空港は総事業費182億・敷地面積107.48haの第三種空港で、庄内の人々の願いを集め一県一港の壁を破った空港である。

工事期間は昭和63年6月より3年間であるが、実際には昭和47年3月庄内空港整備委員による「庄内空港整備計画書」の作成から始まり平成3年10月の開港まで約20年の月日を費やしており、年月・費用ともに大事業であった。

現在庄内空港は、東京・大阪1便を就航しているが、日帰りが出来るように1日2便を目指している。

最近、庄内空港の成り立ちの話を聴く機会に恵まれ、建設工事に地質調査が深く関わっていることに驚いた。

具体的には、基本計画作成時の地質調査

(地盤条件の全体的把握・切取土の盛土材としての検討・地盤の液状化・盛土基礎地盤の支持力、圧密の検討) 建設工事の設計・施工の地質調査(液状化対策・盛土の安定性・基礎の検討) 保安・附滞設備の地質調査が昭和58年より毎年のように実施されていた。これらの調査結果を基に有効な地盤改良工法の検討が行われ、着実かつ迅速に工事が完了した。

地質調査は表面に表れることのない仕事ではあるが、全ての工事の基礎となるものであり重要な仕事であると感じ、これからもこのような大事業に少しでも関わって行きたいと思う。また、このような大事業に関わることによって技術を向上させ、仕事の充実を計って行きたいと思う。

榎新東京ボーリング



庄内空港完成図